明るい人は
すばらしい
悩んでいる人は
尊い

林　暁宇

『2025年難波別院カレンダー』5月のことば

掲示板のことば

以前、肺がんと診断されたある一人暮らしの女性から、お話を聞くご縁をいただいた。その方は「タバコなんて一度も吸ったこともないのに」と嘆かれていた。

6回の強い抗がん剤治療が始まり、体力的にも精神的にもとても辛い時間を一人で過ごされていた。

しかし、治療の途中で医師より「4回抗がん剤を投与したが、成果が出ていない。統計的に残り2回しても高い確率で効果は出ないだろう」と告げられ、「残り2回、どうするか?」と選択を迫られ、一人で途方に暮れながら苦悩されていた。

「親鸞様が『人は縁次第でどうなるか分からない』とおっしゃるのは、とても厳しいことですね。今『治療しない』と決めても、いざ死期が近づくと『残り2回を受けていれば、もしかしたらまだ生きられたかも・・・』と取り返しのつかない後悔をするかもしれない。家族がもういない私には、一人でその後悔を受け止める自信がありません」と話してくださった。そして「だから残り2回治療をやりきって精一杯生きてみようと思います。話を聞いてくれて、ありがとうございます。亡き両親が引き合わせてくれたんだと思います」とおっしゃってくださった。

その時、その方のお内仏に合掌する姿は、とても尊く美しく輝いて見えた。

（大阪教区教化センター）

今月のことば

妙土広大超数限
本願荘厳よりおこる
清浄大摂受に
稽首帰命せしむべし

このご和讃は「広大で数量限度を超越した微妙の浄土は、法蔵菩薩の本願力から飾り現したものである。清浄大摂受の仏に頭を地につけても礼拝し奉れ」（『親鸞和讃集』名畑應順校注）と訳されています。

「数量限度を超越した」とは、数や量では測らない世界が浄土であると、私は受け取っております。私たちは現在、数字で管理された様な社会を生きています。経済活動における金銭や学校教育におけるテストの成績、私たちの命さえも脈拍や心拍数などで測っています。

私は「数字」とは抽象的な事柄を客観的に測る為のものだと受け取っています。ある物事を一度観測できる範囲で数値化をし、そこに客観性を与える事で、ある抽象的な物事を分別する為にあるものだと感じています。その分別をするということは、まさに評価をするという事ではないでしょうか。

先日、とある座談会に参加させてもらった際に「本当の幸せって何だろう？」というテーマで皆で話し合うことがありました。その中で「評価をしない居場所がある」という言葉が出されました。

私たちは何かにつけて評価をしてしまいます。仕事だけではなく、家族や友人に対しても同様です。私は現在、妻と二人で生活をしておりますが、そんな小さな社会の中でも諍いをしてしまうことが度々あります。中々に厄介な事だなと。

ただ私は「評価をしない」とは、「人それぞれ」という言葉とは違う様に感じています。「人それぞれ」とは便利な言葉で、その言葉の中には、その人との関わり合いがないように感じます。また、幼少期から学校生活で点数評価をされてきた私たちにとっては、それは簡単な事ではなく、とても難しいことの様に感じてしまいます。だから分かりやすい評価に逃げこみ、そして人と人との「間」を自分の都合で測ってしまうのかもしれません。

しかし、日々の暮らしの中で、その人と関わり合いながら、その人を受け取り、私も受け取られながら、共に生きてゆくということが「評価をしない居場所」という言葉ではないのかなと、そのように感じています。どんな私でも「ここにいていいんだ」と感じられる場なのだと思います。

（門井　建）

今月のことば出典『浄土和讃』
『真宗聖典』（初版）４８１頁
（第二版）５７５頁
『増補　真宗大谷派　勤行集』
（青本）１２０頁

〈知ってる？ 仏事のあれこれ〉

「永代経」ってなぁに？

～ご先祖の願いを聞く～

富田林市　正受寺　松山　正澄

私のお寺では、毎年五月に大事な年中行事の一つとして永代経が勤まります。まず『仏説阿弥陀経』が勤まり順に焼香をします。次に『正信偈』をみんなで唱和します。最後にご法話をいただきます。

「永代経が私にとって一番親しみ深いお勤めです」といわれる門徒さんがおられます。父母祖父母の納骨や、永代経懇志を納めておられたり、「為先祖並釈〇〇」と書かれた木札などからも、自然とご先祖、亡き人への供養の気持ちが篤い法要になっています。

「ご先祖様のもとを訪ねていったらどなたにいきつくと思いますか。それはお釈迦様ですよ」と墓参りをされた方に声をかけますと、ある先生の言葉が思い出されます。「ご先祖様にお参りしたということで終わる行事から、ご先祖から私が願われていることに気づく仏事にしよう」と。

お釈迦様は、『阿弥陀経』であらゆる仏様が讃える阿弥陀様の世界に生まれることを勧められます。また『正信偈』では、インド、中国、日本の七高僧がお念仏を称えることで、浄土に生まれる功徳を示してくださっています。

インドの天親菩薩は、ナムアミダブツを称えると空しく過ぎることはないよと勧められ、中国の曇鸞大師はそれを受け、私がここに在ることを慶べるからですよと重ねて勧めてくださいます。また、まだまだ大丈夫という自己への期待に大きな夢を見ていてはいけないと誡めたりもしてくださいます。

また日本の源信僧都は、「あなたの人生　ほんとは宝の山のよう　手ぶらで帰っていいのかい」（拙寺の掲示板より）と勿体ないことになってはいけないと心配もしてくださっています。

そんな我われへの願いは今日も「もしお金と暇があって世界中の珍しいところ、美しいところに行って、美味しいものを食べつくしたとしても『内観』という世界を知らなかったら、人生の半分は味わわずに終わるのだ」（大峯顕師）と受け継がれています。お念仏に私を照らされなかったら大事なことに気づけずに終わってしまいます。

永代経は、お勤めをとおして、亡き人やご先祖様の願いをしっかりと聞く場だったのです。（合掌）

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈238〉

知ってるつもり